

IIB の世界書誌編さん活動 1895 - 1914
The Compilation of the Répertoire Bibliographique Universel
by the Institut International de Bibliographie, 1895-1914

根 本 彰
Akira Nemoto

Résumé

The bibliographic work, especially the compilation of the Répertoire Bibliographique Universel (RBU), of the Institut International de Bibliographie (IIB, the forerunner of the FID) was one of the most important experiment that would lead to today's international librarianship, documentation and information science. This article describes its history during the period between the beginning and the World War I, when the work was the most active and the most successful for the leaders.

They compiled the RBU through the process that they received various bibliographies and library catalogues either in book form or in card form, cut them into bibliographic entries, and filed them in the order of authors' names and decimal classification numbers they had added if possible. They regarded the RBU which should have been appeared if they had completed it as the catalogue of human knowledge. They studied the DC and changed it into the UDC because they believed the classification played a very important role in their activities.

Their method was very primitive and amateurish. We think it was not the macrocosmic approach of bibliographic organization but the uncontrolled unification of microcosmic ones. Their eventual failure told us that the time had passed when a single body could make a universal bibliography. But the idea that the compilation of an international bibliography can contribute to the world cultural and scientific exchange and the world peace has been inherited now. And tools such as the UDC which were byproducts in putting the idea into practice have been used world-widely.

- I. はじめに
- II. IIB の書誌活動
 - A. 前 史
 - B. IIB の成立
 - C. RBU (Répertoire Bibliographique Universel)
 - D. IIB のその後の活動
- III. IIB の活動に対する評価
- IV. おわりに

I. はじめに

書誌情報の把握と組織化があらゆる図書館・情報活動の基本であることはいうまでもない。書誌情報とは文献——記録化された知識——に関する情報である。我々が取り扱おうとする文献は一点一点が必ずしもユニークなものではなく、あるテキストに対するコピーであるため、書誌情報を広範な共通の枠組みで組織化する意義が生じる。この組織化の試みを、通常、書誌コントロール (bibliographic control) と呼んでいるわけである。例えば、あるひとつの図書館内における書誌コントロールは、ある程度、共通の蔵書をもつ限り、他の図書館の書誌コントロールと共通の基盤をもつことになる。そして、対象とする文献の範囲が、単一の文献のタイプ、特定の地域、ひとつの主題から、複数のタイプ、地域、主題へと広がっていくにつれ、その範囲内での書誌コントロールは、より多くの図書館のテクニカルサービスの基盤となりうる。この文献の範囲を極限にまで拡張したときに生まれる概念が、世界書誌コントロール (UBC) に他ならない。今日、専門的分野でサービスを行っている多くの図書館は、この全世界的な文献の広がりとは無関係ではありえず、広範囲の書誌情報の組織化の出現を待ち望んでいるわけである。

さて、本稿は、世界書誌コントロールを考えるにあたって避けられない問題——書誌情報の一元的集中化の問題を IIB (Institut International de Bibliographie) の書誌編さん活動の検討を通じて追究してみようというものである。実際、現在の FID の前身にあたるこの IIB の歴史は、世界書誌づくりへの理念とその完成への献身的な努力そして挫折というように、集中的書誌作成の可能性と限界を示しているといえる。世界中の文献の書誌情報をカード化し主題によって分類することを目的として始まったこの活動が、なぜ行き詰まり、書誌作成の補

助的手段であった分類表 (UDC) の整備や他の技術的研究へ重点が移されなければならなかったのか。IIB の活動の中心的役割を果たした Otlet および La Fontaine の真のねらいがどのようなところにあったのか。彼らの作成した書誌は、真に世界書誌と呼べるものになっていたのか。彼らの活動は、当時そしてその後の図書館界ないし図書館・情報学にどのような影響を与えたのか。これらは、今日すすめられている世界的規模での書誌コントロール¹⁾をさらによいものにするために解明されなければならない課題である。IIB の活動は、パイオニアとしての価値とともに、現在さらに将来の我々の行動への指針としても、歴史的に振り返られるべき存在である。

ここでまず先行研究の確認をしておこうと思う。歴史にとって、先行研究の蓄積とその批判は欠くことのできない要素であるからである。この活動は、UDC そしてドキュメンテーションの創始としてしばしば言及され、記憶に留められているけれども、詳細な研究、特に書誌活動についての研究はあまりなされていないというのが現状である。今²⁾が指摘するように、Otlet についての研究書が近年刊行され、初めて詳細なことがわかるようになった。³⁾この著作は Otlet の書簡や手稿、IIB の機関誌のような一次資料を駆使して書かれた労作であり、IIB の活動についても詳しく叙述されている。これとともに、IIB——FID の歴史一般について述べた比較的新しい文献には、他のいくつかの書誌活動と比較した Ditmas,⁴⁾ Murra,⁵⁾ La Fontaine と Otlet の簡単な伝記である Lorphèvre,⁶⁾ IFLA の活動と比較した Scott,⁷⁾ Otlet の思想について詳しく論じた Rayward,⁸⁾ 適切な歴史記述と評価がみられる Arntz⁹⁾ などがある。これらは、多かれ少なかれ一次資料に依存するかあるいは IIB の活動に近いところにいた人によって書かれたものである。しかし、ぼう大な活動のなかで顕著に表われた部分をつないだ記述か、活動の一部を詳細に検討した

もので、広さと深さをもった研究は初めに挙げたものだけである。¹⁰⁾

日本人による研究に至ってはさらに少なく、一次的資料によって書かれたものはまったくないと思われる。その理由のひとつは、IIBの機関誌であった *IIB Bulletin* が日本の図書館に所蔵されていないことにあると推測される。¹¹⁾ 従って、IIBについて解説を加えている数少ない日本語文献(小倉,¹²⁾ 前嶋,¹³⁾ 今,¹⁴⁾ 藤野¹⁵⁾)にはそれぞれ典拠となる研究論文が存在すると思われる。

以下の記述は、これまで挙げた先行研究を土台にして、入手できたIIBの出版物および、IIBと密接な結びつきがあったりそこを訪問したりした英米の図書館員の残した記録に基づいて構成したものである。歴史記述は、IIBの設立直前から第一次大戦勃発までの期間に限定することにした。これは、紙数の都合とこの時期に創立者の理念と実践が顕著に表われたという事情の2つの理由によるものである。そのため先程の課題すべてに答えきれないが、最後の章で残された課題の検討の方向性を簡単に述べておいた。

II. IIBの書誌活動

A. 前史

La Fontaine (Henri 1854-1943) と Otlet (Paul 1868-1944) の出会いおよび彼らの書誌への関心の芽生えは、両者が著名な法律家 E. Picard のもとで法典集 *Pandectes belges* の編さんをしてきた1880年代に始まった。彼らはいずれも法律家であり、La Fontaineは国際平和に、Otletは社会科学一般に関心をもつ社会学者でもあった。年長であったLa Fontaineは、書誌への関心を実行に移すのもOtletより早かった。彼は、1889年ベルギーのアルパイン・クラブに対して山岳探検の世界書誌作成の提言を行っている。1890年に彼は、できてまもないブリュッセルの社会政治研究学会 (Société d'Études Sociales et Politiques) に書誌作成の部門を設け、社会科学文献のカードによる索引づくりを始めた。この部門がIIBの前身であり、ここでつくられたカードが、後のRBUの第一歩ということができる。翌1891年、ブリュッセル弁護士会 (Barreau de Bruxelles) に Picard を中心として書誌作成の部門がつくられ、法律雑誌の記事索引¹⁶⁾が刊行され始めた。

この段階でOtletは書誌作成の仕事に深く関与していた。特に法律記事索引はPicardの指導のもとで、Otletが実際の編さんの中心となっていた。彼は、法律家とし

て早くから身を立ててはいたが、法律の仕事にはあきらないものを感じ、若い頃に学んだ Comte の実証的社会学を現実の場に生かす方法について模索していた。そうした背景と La Fontaine との親交から生じた書誌への関心が結びついて生まれたのが、後のIIBの指導方針を確立したともいえる論文であった。¹⁷⁾ これは若い弁護士が集ってつくっているフォーラムの機関誌に掲載されたものである。彼はここで、社会科学に自然科学のもつ実証的性格を付与する方法として、書誌の整備が有効なことを説いた。彼は、社会科学が「秩序も方法もほとんどなしに集められた文献をもとにした個人的意見の集合でしかない」¹⁸⁾ とし、これを解消するためには、社会科学文献の科学的分類とその目録の刊行(著者名と主題による組織化)によって、新しい知識がひとつひとつ単位として切り離され、カードに記録されるようになることが望ましい。こうして、自然科学のように、観察の結果や意見が重複なく蓄積され、統合、法則定立へ進むことができる、というように考えた。

ここに表われた Otlet の考え方は、IIB の成立から RBU の作成理念の基本として、常にみられたものである。文献の書誌情報をカード化し、それを主題によって再配列することによって、知られていることから——知識——のカタログがつくられ、それによって新しい研究の指針を得ることができるという発想は、ここでは社会科学文献に対して適用しているわけだが、その後、あらゆる領域へ拡張される概念となったのである。彼はこの論文のなかで、これを完成させるためには特に、学者・研究者や学会の協力の必要性和社会科学の非常に組織的な分類表の重要性を説いているが、それらはすぐに実行・研究され始めるのである。

すなわち、Otlet の論文をきっかけとして1893年に社会科学と法律の2つのグループは接近し、それぞれの書誌作成のために蓄積していたカードのコレクション(4万点)を一緒にし、Office International de Bibliographie Sociologique (OIBS) を設立した。この機関は1895年に改称され、Office International de Bibliographie (OIB) となるわけである。La Fontaine と Otlet は、この機関を足がかりに国際的な社会科学文献の収集と書誌情報の提供を行おうとした。先の法律記事索引に加え、1894年には社会科学の索引誌を刊行しはじめた。そのためのカードによる1点毎の記入の蓄積が進められ、1895年までに40万点のカード書誌がつくられていた。2つの分野の書誌は、*Bibliographie des sciences*

sociales (後には *Bibliographia sociologica* に改称) のタイトルに統一され、社会・経済部門と法律部門をあわせもつ定期刊行の書誌として継続されることになる。これが、1895年の IIB 設立以前の La Fontaine および Otlet らの書誌活動の概略である。

この段階までの彼らの関心は、ほとんど法律や社会科学の分野に集中していた。1895年までに集められた40万枚のカードは、“特に法律、統計、経済、哲学、文学といった科学の主要分野”¹⁹⁾に限られていた。これがすべての主題分野へ関心がひろがるのは、彼らが M. Dewey の十進分類法に注目してからである。彼らは図書分類法への強い関心を示してはいたが、DC に着目したのは偶然の要素によるところが大きかった。Rayward の研究によれば、旅行中の Otlet が耳にした DC の評判をきっかけとして、彼らはこれを取り寄せ、それが、彼らが構想として抱くようになっていた世界書誌の分類としてふさわしいことを発見したのである。²⁰⁾ Dewey の分類表 (以下 CD とする²¹⁾) と RBU の関係についてはあとで述べるが、この分類表の出現によって彼らの“地平が無限に拡大され”、“すべての主題を包括する世界書誌の目録を作成することができるという希望をもつ”²²⁾ようになったのである。

B. IIB の成立

FID は公式には、1895年をその成立の年としているが、これまでみてきたように実際の活動はそれより4～5年前から始まっていたと考えることができる。しかし、1895年はこの一連の活動にとって、あらゆる意味で出発点になった年であった。それは第1に、それまで La Fontaine, Otlet, そして La Fontaine の妹 Léonie の3人が実質的に作成していたといえる書誌カードに関する問題がベルギー政府の管轄下におかれるようになったことであり、第2に、書誌づくりの理論的基盤の研究するための機関 IIB が結成されたことである。この年の9月2日から5日にかけて、ブリュッセルで第1回国際書誌会議が開催された。これは、La Fontaine および Otlet が中心となって、社会科学の狭い領域で行っていた書誌作成事業を、より広範に国際的規模で、多くの図書館員や研究者の協力のもとに再組織化しようという、彼らの宣言の場であった。

CD を入手し、仏語への翻訳作業等の研究をはじめて半年にも満たないこの時期に、彼らが急いで国際会議を開催したのは理由があった。英国の Royal Society

は過去30年以上にもわたって *Catalogue of scientific papers* という書誌を刊行していたが、1894年にこれに代わる書誌を新たにつくることをきめた。そして1896年にこの問題について議論するための国際会議が予定されていた。La Fontaine らは、ひとつにこの会議との競合を避けること、また、この会議が各国の公式の代表を集めるのに対し、彼らの構想においては、こうした問題に関心をもつ人が個人の立場で参加し、発言することによって、Royal Society の会議との相乗効果をもたらす意図をもっていたのである。²³⁾ このように急遽、開催されたために、彼らの意図はベルギー以外の国には十分に伝わらず、他国の図書館員には“それについて聞いたこともないとか、後で聞いたため参加できなかったといった人が多く、この会議は、‘国際的’とはいえない”²⁴⁾などと評された。

とはいえ、この会議では重要な決議がいくつもなされた。特に注目すべきものを挙げると、

- I. 実際の・国際的な観点からして、CD が満足すべき効果をあげている。
- II. あらゆる国で共通のものを追求するためにその全面的な採用を勧告する。
- III. 各国政府に対し、書誌作成の国際的オフィスの創設をめざし、世界書誌の連合体をつくることを期待する。この希望をベルギー政府に伝えることを事務局に委任する。
- IV. IIB の創設を決定。
- V. 組織的な分類は完全に正確な全国書誌の存在を前提とするので、各国政府に対し、法定納本に関する法制度の重要性を示す。
- VI. 各国政府が全国書誌に関わる際には、CD の採用を主張すること。
- VII. 個々の書誌類(特に商業出版社の販売書誌)が CD を採用すること。²⁵⁾

ここでは、III と IV について解説しておかなければならない。一般に、FID の前身は IIB であり、この機関が世界書誌の編さんに携わっていたと考えられているが、それは必ずしも正確ではない。前述のように、第1回国際書誌会議以前に書誌編さんを行っていたのは OIBS であった。OIBS はこの会議の直前に OIB と改称され、社会科学関係の書誌情報のカード化、索引誌の発行などの仕事をしていたのである。けれども、これが真に国際的にまたあらゆる領域での仕事をするためには、財政的裏づけとなんらかの権威づけが必要であった。そしてそれ

はベルギー政府による財政援助となかば公的な性格の付与によって可能となった。すでにこの会議自体が政府の後援を受けたものであったが、²⁶⁾ 決議のⅢにみられる事務局 (bureau) とは実質的に OIB のことであり、ベルギー政府への継続的財政援助の要請をここに読みとることができる。

同年9月14日²⁷⁾に国王 Léopold II の勅令が下され、OIB は正式にベルギー政府 (内務公教育省) の管轄下にはいり、サポートを受けることが決定した。その使命は、世界書誌の確立と出版、それによるサービス、書誌に関するすべての問題についての研究といったことであった。その構成は、国王の任命による5人の正会員と不定数の準会員よりなっていた。Otlet は正会員の1人選ばれたが、La Fontaine は社会党所属の議員ということで外され、書誌関係の活動の重点を IIB の方に移すことになる。²⁸⁾ OIB の活動は、Otlet の他、Charles Sury を事務局長に、20~30人の常勤のスタッフと20人程のボランティアが支えていた。

他方、IIB は、この会議によって (決議Ⅳ) 新たに設立された機関である。OIB が書誌編さんの現業部門に属するのに対し、IIB はそれを側面から理論面について補強し、国際的事業にまでバックアップすることを主眼としていた。IIB 結成の規約 (1895年) の第Ⅰ条は、IIB が“もっぱら科学的機関”であり、その目的として第一項に“人間精神の生産物 [文献] の目録化、分類、記載の振興に寄与する”とあり、第二項では“この分類法 [CD] の科学的特性をさらに伸ばし、より国際的で完全なものにすることによって書誌における統合をはかる”²⁹⁾ として、特に Dewey 分類表の整備に努めることを明記している。事実、IIB の仕事の中心は、各主題の専門家と協力して CD を展開し、ぼう大な数のカード (RBU) を整理するための基礎をつくることであった。IIB はまったく個人が単位となって参加する学会であり、その研究の成果たる出版物の刊行³⁰⁾や国際会議の開催なども行っていた。

このように形式的には OIB と IIB は別箇の機関であったが、実質的には両者は一体となって活動していたといえる。IIB は、最初の会長にこの活動のパトロンの存在であった Baron Descamps をおいていたが、Otlet が事務局長、La Fontaine が財務担当であり、この両名のリーダーシップのもとに活動がすすめられた。書誌作成とその理論的基盤たる CD の整備は実際上切り離すことのできないものである。従って、IIB の機関誌であ

った *Bulletin* には、両方の機関の活動が紹介されており、ある仕事が OIB のものか IIB のものかを区別するような記述はあまりみられない。むしろ、中心となって活動していた人々にとって、そのような区別はほとんど意識されず、OIB が IIB の下位部門と考えられていたようである。特に20世紀になってから、OIB の名称はあまり使われなくなっている。³¹⁾ そこで、本稿も、OIB と IIB を一体の機関とみなしてそれに“OIB”の名称をあて、特に区別する必要のあるときのみ“OIB”の名称を用いることにする。

C. RBU (Répertoire Bibliographique Universel)

RBU は、La Fontaine、Otlet が1890年以来印刷刊行の書誌の原稿として蓄積したカードがもとになっていることはすでに述べた。IIB の書誌活動の中心にあたるものがこの RBU であるが、その中味が何であるのか、なぜカードで作られ印刷されなかったのかなどの点は知られていないと思われる。広義の書誌コントロールの概念においては、文献に関する情報 (書誌情報) を何らかの手がかり (例えば著者名、書名、主題語、分類番号) の既知の順序 (ことばのアルファベット順、十進法等の数字の配列順) によって並べたものが書誌である。この原則に従えば、図書館の蔵書目録も、雑誌論文の索引も、対象とする文献群がはじめから限定されている点で特殊であるが、書誌の一種ということができる。RBU は後述の様々な点で特異ではあっても、基本的にこの原則から外れてはいない。

第1回の国際書誌会議に La Fontaine と Otlet が提出したペーパーには、RBU が次の事項を満足しなければならぬとして、8点挙げられている。

1. 完璧なものであること。過去・現在の書誌情報をすべて把握する。また将来の流れも把握できること。図書や小冊子だけでなく、雑誌論文や学会の記録、会議の議事録も含める。
2. 著者名順と体系順の構成をとる。特に関連主題をグループ化して、主題が分散するのを避ける。
3. RBU は複数部数へ分散させる。個人の所有物ではその価値は低く、十分に利用されない。
4. 訂正および削除が容易なものであること。内容においても、採用する分類においても、常に正確性もとめられる。
5. 既存の書誌のほとんどのものを利用する。これにより、迅速に、必要としている人に使ってもらえる。

6. RBU は所蔵館の目録と結びつくこと。図書館の蔵書があらゆる研究者に開かれ、利用されるように。
7. RBU は知的生産物の統計の基礎となる。
8. RBU は知的作品の法的保護を著者に保障することができる。³²⁾

これらの点がどのように実現されたかを具体的に検討してみよう。

最初に、RBU の完璧さについてはどうであろうか。この概念は、他のところで普遍性 (universel, universalité) と表現されているものである。例えば、1902年には、RBU が単一の図書館の蔵書を示すのではなく、それがどこに所蔵されていようと存在するすべての作品についての情報を与え、“時間的にも、空間的にも、言語についても、内容についても、まったく普遍的 (universel) であると考えられる” と述べられている。³³⁾ それ自体ほとんどコレクションをもっていない IIB³⁴⁾は、この普遍性を追求する手段として、時間的、空間的、そして言語上のギャップを埋めるために、世界各国の大図書館の蔵書目録を積極的に取り込んでいった。初めにRBU に組み込まれた蔵書目録は、British Museum のものであり (1899)、次いで Bibliothèque Nationale (1901より)、LC の印刷カード目録 (1902年に Otlet と Putnum の間に交換協定が取り交される)、Königliche Bibliothek in Berlin, John Crerar Library などの目録あるいは新着図書リストがRBU を構成していった。

この事実は、6の所蔵情報とも密接に関係する。複数図書館の蔵書目録を結合することは、総合目録を作成することを意味する。そのためRBU はそれ自体総合目録の機能をも果たすことになるわけである。けれどもRBU とは別に、Catalogue Collectif des Bibliothèques de Belgique と呼ばれるベルギー国内の図書館の総合目録 (Rép. ON, Rép. ONR) がIIB において作成されていた。Pafford³⁵⁾によれば、ベルギー国内で初めての全国総合目録であり、IIB のオフィスが1895年から1904年まで王立図書館におかれていた間に作成がすすめられたが、その後は継続されなかった。RBU と同様に、冊子体の蔵書目録を1点1点切り離し、カードにはって、アルファベット順に配列しただけのものであったので、目録コードの相違や印刷目録を出していない図書館の存在のため、この目録は不正確で断片的なものでしかなかった。

RBU を構成するものは、大図書館の蔵書目録以外に各種の書誌類があったが、それらはいずれも受け入れら

れた後、すぐにカード化された。RBU への要請事項の4番目にある、訂正・削除の容易さがカードという形式をとらせた最大の要因であった。カードは当時、アメリカで普通に使用されていた3×5インチの標準カードが採用された。これは後にIIB のひとつのセクションになる Concilium Bibliographicum のリーダー H. H. Field の提案になるものであった。³⁶⁾ 彼はハーバード出身の若い動物学者で1892年から95年にかけて動物学関係の書誌作成の構想を進展させ、1896年にチューリヒに Concilium の事務局を開き、カード形式の書誌を発行しはじめたのである。³⁷⁾ RBU の重要な構成要素となりうるこの書誌が採用している標準カードへの統一の提案は、IIB にもすぐに受け入れられた。

カードの利便さは、単にさしかえの容易さだけにあったのではない。5番目の要請事項にある既存の書誌の利用を可能にする唯一の手段とも考えられた。すなわち、冊子体の書誌の記入ひとつひとつを合わせて、単一の系列に並べ直すには、それぞれを切り離してカード化することが必要だったのである。ここで *Bibliographia Universalis (BU)* について説明しておかなければならない。これは、IIB と特別に契約を結んで長期にわたってRBU の情報源となる一連の書誌の総称である。ところがこのことばには、IIB から刊行される書誌という意味も含まれていた。IIB の公式の説明は次のようなものである。

IIB のRBU のための、印刷された情報源のコレクションであり、別々に専門家によって編さんされ、統一されたプランと共通の方法に従って、一国のあるいは国際的な様々な協会や機関の協力によって刊行される一連の書誌によって形成される。いくつかの情報源は直接カードに印刷され、また他のものは独立した冊子体ないし雑誌の付録として印刷されるが、切り貼りによってカードをつくれるような方式をとっている。*BU* は読者に対し、IIB の手稿目録に頼る必要なく様々な科学の書誌作成の動きに遅れないでいく手段を与える。³⁸⁾

このように *BU* は、基本的にはRBU の情報源でありながら、同時に、IIB において1部しか作成されないRBU の限界を印刷・配布によって補おうという意図のもとにあった。

BU を構成するものは〈contribution〉として一連の番号が与えられていた。その第1号は La Fontaine, Otlet らが当初から手がけていた *Bibliographia socio-*

第1表 Bibliographia Universalis (1905年5月1日現在)

| 番号 | 書 誌 名 | CD | 刊行形態 ¹⁾ | 刊 行 年 | 記入総点数 | 編者 ²⁾ | 出 版 者 ³⁾ 出 版 地 |
|----|--|---------|--------------------|---|---------|------------------|------------------------------|
| 2 | Bibliographia zoologica. | 59 | Aba Abb Cb | 1896-1903 Id. Id. | 117,242 | C | CB |
| 3 | Bibliographia philosophica. | 1 | Abb Bba | 1895-1904.08 (fascicules 1 à 39). | 16,363 | C | Louvain |
| 4 | Bibliographia physiologica. | 612 | Abb Cb | 1893-1896 (tome I). | 9,007 | C | CB |
| 6 | Bibliographia anatomica. | 611 | Aba Abb Cb | 1897-1904 | 12,139 | C | CB |
| 8 | Bibliographie des chemins de fer. Édition française et anglaise. | 385+625 | Abb Bbb | 1897-1903 | 21,732 | C | Bruxelles |
| 13 | Bibliographie d'Eure-et-Loir. | 44.51 | Aba Cb | 1898-1901 Id. | 720 | P | Chartres |
| 15 | Bibliographie de Belgique. | 493 | Aba | 1851-1904.06 (tomes I à IX et fasc. 1 à 6 du tome X). | 102,554 | C | Bruxelles |
| 16 | Bibliographia geologica. | 55 | Abb | 1898-1904 (tomes I à XV). | 44,128 | C | Bruxelles |
| 17 | Bibliographia juridica Por- tugalensis. | 34(469) | Abb Cb | 1898-1902 Id. | 1,106 | P | Lisbonne |
| 20 | Bibliographie de l'électro- biologie. | 537.531 | Abb Bbb | 1890.03 à 1905. janv. | 2,495 | C | Paris |
| 30 | Bibliographia medica. | 61 | Aba | 1900-1902 (tomes I à III). | 108,000 | P | Paris |
| 31 | Bibliographia bibliographica. | 016 | Abb Bba Cb | 1898-1902 (tomes I à IV). | 2,960 | C | IIB |
| 38 | Bibliographie de la paix. | 172.4 | Abb Cb | 1904 (tome I). | 2,222 | P | IIB |
| 39 | Bibliographia economica. | 33 | Abb Bbb | 1902-1904.02 (tomes I et III et fasc. 1-3 du tome III). | 9,020 | C | IIB |
| 40 | Bibliographia agronomica. | 63 | Abb Cb | 1903-1904 (fascicules 1 à 8). | 4,932 | P | IIB |
| 41 | Bibliographia technica. | 6 | Aba | 1903.04 à 1905.01 (fascicules 1 à 22) | 31,412 | C | IIB |

出典は、注 39) を参照

- 1) Aba 定期的刊行の独立書誌
Abb " , 片面印刷
Bba 定期的刊行物の付録
Bbb " , 片面印刷
Cb カード形態
- 2) C 団体による編集
P 個人による編集
- 3) CB Concilium Bibliographicum
IIB Institut International de Bibliographie
上記以外は出版地

logica であり、第2号は Concilium Bibliographicum が1896年にはほとんど完成していた *Bibliographia zoologica* であった。書誌のタイトルをラテン語の命名法にほぼ統一しているのがひとつの特徴である。1905年までにこうした〈contributions〉は41を数え、それらが提供したカードは50万点以上になっている。第1表³⁹⁾は1905年段階で BU を構成している書誌類のリストとその収録点数の詳細を示している。このリストには16の書誌しか掲載されていないが、この収録から外れたものは収録点数が数百点と少ないとか1回しか刊行されなかった定期行物などである。⁴⁰⁾ カードで入手できるものが8種類14万点にのぼることがわかる。これら8点の書誌のうち、3点は IIB、3点は Concilium Bibliographicum が出版元である。また、組み込みやすいように、片面だけ印刷し裏は白紙というのめかなりの数にのぼる。

リストのなかで〈contribution n° 15〉にあたる *Bibliographie de Belgique* は、ベルギーの全国書誌にあたるもので、IIB の緊密な協力のもとに編さんされていた。第1回国際会議の決議 (V, VI) にみられたように、RBU の実現にとって全国書誌の整備とそれへの CD の採用は基本的なものであるとの認識が IIB の方針の基調にあった。ベルギーの全国書誌編さんへの協力はその具体的なあらわれである。この書誌は1875年から刊行されていたが、IIB の成立とともに、全3部のうちの前2部 (図書と雑誌のアルファベット順) についてはそれを受け入れカード化して CD を付し、RBU に繰り込み、第3部 (雑誌論文の CD による分類) に対しては全面的な編さんの協力を行った。⁴¹⁾ この協力関係は第1大戦直前まで続いた。*Bibliographie de Belgique* は1906年からカード形式の図書目録 (冊子体の第1部に相当) が刊行され、1901年から始まっていた LC のカード目録につづくサービスとなった。

BU を構成するものなかには、個人編さんの書誌やイタリアのベストセラーの目録、雑誌の目次サービス、英国やベルギーの公共図書館の蔵書目録など多種多様なものが含まれていた。⁴²⁾ なかでも、個人編さんの書誌のなかには IIB 刊行のものがかなり存在する。例えば、La Fontaine の *Bibliographie de la paix* や Ottavi および Marescalchi の *Bibliographica agronomica universalis* などである。これに、IIB 編さん・刊行のもの (例えば *Bibliographia bibliographica universalis*) を加えて考えると、BU が RBU の情報源のみならず、RBU が広く利用されるための手段となるという意味づ

けも理解しやすくなる。RBU 本体はプロト・タイプであり、その複製物 (印刷書誌) が広く行きわたることによって初めてその価値が生じてくる。⁴³⁾ IIB 刊行の書誌は言うに及ばず、それ以外の BU に含まれる書誌もすべて RBU を構成すると同時に印刷形態で利用することができる。IIB がそのような外部で作られていた書誌をも RBU からの生産物とみていた節があるのも、RBU を広い範囲で利用するために BU が不可欠であったことを示している。

BU は、1912年までに103の〈contributions〉による約130万件の書誌情報を RBU に提供していた。⁴⁴⁾ BM 等の図書館の蔵書目録とこの BU が情報源の主なものであったが、どちらにも属さない書誌類は他にも数多くあった。各国のカレントな全国書誌、例えば *Bibliographie de la France*, *Bookseller*, *Nederlandsh Bibliographie* など、また様々な機関が作成している専門的な書誌、例えば Royal Society の *Catalogue of scientific papers* やそれを引き継いだ *International catalogue of scientific literature* などである。これら情報源の数は、1912年までに2000件に達していた。⁴⁵⁾ OIB の作成作業において、少数の例外的にカードのかたちで提供されずで CD の記号が付されているものは、そのまま繰り込むことができた。しかし、大部分の情報源は冊子体であって、主題作業がなされていないものも多かった。記入のひとつひとつを切り離し、カードにはりつけ、CD をつけるというのが最も基本的な作業であった。

RBU は著者名順カードと分類順カードを2本の柱として、他に、いくつかのそれらを補うカード群およびカード作成のコントロールや IIB の活動をすすめたりするためのカード群から構成されていた (第2表)。⁴⁶⁾ 表の右に挙げられているカード枚数からわかるように、すべての書誌単位について著者名順のカードと分類順のカードが必ずつくられているわけではなかった。著者名や書名だけの書誌情報から主題の分類作業を行うことは難しいのである。Rayward は、IIB 結成後まもない1896年に Royal Society の *Catalogue of scientific papers* を RBU に繰り込む作業があったことについて書いている。⁴⁷⁾ 4人の女性が8月25日から28日の4日間で、1日に2000枚のカードを作成しなければならなかった。このエピソードは、RBU の作成が慎重なつき合わせの結果、ひとつひとついいねいに行われたのではないことを示している。と同時に、40万点の社会科学のカード書誌から始まった RBU が10年間で15倍の600万点にまでふくれ

第2表 RBU の構成 (1905年現在)

| 種 類 | 名 称 | 内 容 | 収録点数 (万点) |
|-------|----------|--|--------------|
| 著者名順 | Rép. N | 図書・雑誌論文を問わない著者名順の目録 | 311 |
| | Rép. NR | 定期刊行物の誌名順の目録 | 0.5 |
| | Rép. NT | Rép. N の補遺。図書・論文のタイトルないしそれを代表する語による配列。特に文学作品に多い | — |
| 分 類 順 | Rép. A | 展開された書誌分類表に従った主題・内容による詳細かつ決定された分類 | 160 |
| | Rép. B | 大まかな一時的分類で、分類表が展開されれば、Rép. A に移される | 95 |
| | Rép. AG | 特定の地域(国・地方・都市)を扱うものにつき Rép. A から複製する。地域毎の配列 | 6 |
| | Rép. AC | 分類順配列による選択書誌。いまだ不十分 | 1 |
| そ の 他 | Rép. TE | これらは Rép. N, A, B のコントロールのためのもので、TE は図書の版元・刊行年順、NRT は誌名・刊年順 CD における用語のコントロールカード ベルギー国内の図書館の総合目録。ON は図書、ONR は雑誌。参加図書館は 52 | — |
| | Rép. NRT | | — |
| | Rép. I | | — |
| | Rép. ON | | あわせて 47 |
| | Rép. ONR | | |

出典については、注 46) を参照

あがった秘密をも示している。これはその後も増えつづけ、第1次大戦後の1922年には1200万点に達した。⁴⁸⁾

分類順カードは、展開された分類表に従う Rép. A と展開される以前の分類表に従う Rép. B に大別される。⁴⁹⁾ CD の展開は RBU の補助的手段ではあったが、仕事の比重としてはそれと並ぶものであった。ここでは、CD の展開に対する Otlet と Dewey とのやりとりについて述べる余裕はないが、⁵⁰⁾ DC 第5版の法律と社会学の部門のフランス語への翻訳で始まった十進分類法の導入が、各主題分野毎に IIB 会員の専門家の協力によって次々に展開されていったことについてその背景を簡単に述べておきたい。

RBU および CD による知的生産物の完全な把握、組織化、位置づけの構想の中心人物であった Otlet⁵¹⁾ の考えでは、RBU はすべての出版物=知的生産物(その刊行年代、場所、形態を問わず)の構成する(encyclopédie 百科事典)の目次であり索引であった。そして詳細に階層化され特定化された分類表において、出版物のトピックや主題は完全な位置づけをもつ。⁵²⁾ つまり、文献のひとつひとつはそれぞれ固有の内容をもつわけであるから、分類記号も固有のものをつけられなければならない。そのため CD において、主分類表における詳細な展開とともに補助標数や各種の記号による数字の組み合わせ

せが考案されたのである。これはいわゆる書誌分類に共通な特性であろう。⁵³⁾

展開と分類順目録の作成はおおむね、DC の翻訳→ Rép. B への繰り込み→部分的な展開→展開された部分の Rép. A の作成、という順序ですすめられた。⁵⁴⁾ こうして1904年から7年にかけて、最初の UDC と言うべき *Manuel du Répertoire Bibliographique Universel* が刊行された。1905年にはその簡略版が刊行されている。前者は、それまで個別の分野で刊行されていた展開された分類表やカード作成のための目録コードを合わせたもので、2000ページを超える RBU 作成のための手引きであった。書名からも、この時期の IIB の CD の整備が RBU と一体になったものであったことをうかがいすることができる。

このようにして作成された RBU はどのようにして利用されたのであろうか。1万を超えるひきだしに納められた数百万枚のカード目録は、ブリュッセルの王立図書館と同じ建物のなかの IIB=OIB の事務局におかれ、毎日一般に公開されていた。直接に利用することのできない人のためには、郵便での要求に応じて、特定主題あるいは特定の著者のカードをタイプライターで複製し郵送するサービスも行われた。⁵⁵⁾ 要求の数は、1896年に21件であったが、翌年その3倍となり1500枚のカードがコピ

一された。1912年までには毎年1500件のリクエストが寄せられ、コピー枚数も1万枚を超えるようになった。⁵⁶⁾

RBU への要請事項の3番目にあった複数部数へ分散させるという課題は、部分的にはBUの印刷書誌によって実現させたが、カードをそのまま世界各国へ寄託する計画もそれを構成するものであった。IIB 創設時の La Fontaine や Otlet の構想によれば、“あらゆる都市、あらゆる知的な中心地に地域的な書誌活動のオフィスをつくり、中央のオフィス [IIB] から印刷された書誌を受けとる⁵⁷⁾” ことになっていた。しかしこの計画が組織的に継続的に実践されたことはなかった。1896年にパリでIIBの活動に関心をもつ人が集まって Bureau Bibliographique de Paris が初めての IIB 支部として設立された。1900年のパリの万国博覧会に IIB は200万枚のカードを出品・展示し、その終了後、カードの一部をパリの支部に寄託した。けれどもこの支部の主な関心が応用科学に片寄っていることなどもあって、IIB と同様のカードの維持をその後、続けていくことはできなかった。他にも、LC との協定によって1903年までに7万枚のカードがワシントンに送られたり、1904年のセントルイスの万博やルクセンブルグ、ブルガリアにもカードが送られた。1911年から1914年までにはリオデジャネイロから60万枚のカードの注文があり、35万枚が実際に国立図書館に届けられた。しかし、こうした措置は一時的なものでしかなく、送付されるカードもRBUの全体ではなく、BUの最新の部分であったため、当初の目的を実現するには程遠かったといえよう。⁵⁸⁾

D. IIB のその後の活動

RBU の作成とCDの整備をすすめる基盤をつくっていくために、IIBは国際的協力を推進していった。1897年にはブリュッセルで第2回の、1900年にはパリで第3回の国際書誌会議が開催された。各国の公式代表が初めて一堂に会した第3回目の会議では、(1) 全国書誌や専門書誌、選択書誌を個別に整備することによって世界書誌が実現される、(2) 特にカード・コレクションによる書誌を整備する、(3) 各国で出版に関する基本的統計を整備すること、(4) 法定納本制を全国書誌作成の観点から整備すること、などが決議されている。⁵⁹⁾ 1908年には第4回、1910年には第5回目の会議がつづけてブリュッセルで開かれた。このころのIIBの関心は依然として集中的書誌作成事業にあり、国際協力の重点は、各国の国を単位とした書誌整備の相互の調整よりも、いかにし

てIIBに個別の書誌を統合するかということにおかれていた。会員はヨーロッパ各地およびアメリカ合衆国にひろがり、数百人にのぼっていた。

IIBの活動を貫く指導理念に〈documentation〉のことばが使われるようになったのは1900年代にはいつからのことであった。⁶⁰⁾ “書かれたあるいはグラフィックな知識の源全体を有効に活用すること⁶¹⁾”を意味することばは、Donker Duyvis が述べているように“図書館や文書館の職員の唯一の仕事が、文明の宝庫を後の世代のために保管する目的をもって、図書、手稿、文書を保存・保護することを意味した古い図書館や文書館に対する反動⁶²⁾”であった。実際の活動の観点からすると、〈documentation〉は第1に文献のコレクションそのもの、第2に書誌編さんのような作業、第3にコレクションや書誌、そしてその確立や情報提供に携わる職員等から構成されるサービスの3つの部分からなっている。⁶³⁾ これまで述べたIIBの活動はコレクションの構築こそなされなかったものの、第2、第3の線に沿ってすすめられてきたわけである。

IIBの活動が最も軌道にのっていた1900年代初頭に、これまでの活動をさらに拡張する新たな事業がいくつか始められた。ひとつは〈documentation〉の第1の要素であるコレクションの構築である。1906年から Bibliothèque Collective des Institutions et Associations Scientifiques が活動を始めた。これは、ブリュッセルにある多くの学協会の協力で、それぞれに分散しているコレクションを一箇所に集めた一種のデポジット・ライブラリーであった。RBUが書誌の寄せ集めであるように、この図書館も寄託される文献の所有権は各機関にあり、独自の自律した活動はできにくい存在でしかない。けれども、参加する機関はいずれも国際的な性格を持っており、いずれは20世紀の代表的なコレクションを獲得して、RBUに対応できるものをめざしていた。⁶⁴⁾

〈documentation〉が扱う文献は、RBUが対象としていた図書や雑誌論文に限られていたわけではない。1905年から Répertoire Iconographique Universel (Rép. PH) が始められた。これは視覚に直接訴える写真、絵入り文献のコレクションである。21.5×27.5cmの市販の紙か、9×14cmのはがき大の大きさにカード化され、RBUと同様にCDで分類され、大型のひきだしに納められた。主に美術、民族誌や旅行、歴史・伝記、自然科学、工業・商業の分野で作成され、イメージによる百科事典をつくりだすことを目的としていた。コレク

ジョンの1点1点についてカード目録もつくられた。これが作成される時点でコレクションのストックが10万点あり、うち1万2千点が分類整理され、目録カードが2万4千枚つくられた。⁶⁵⁾

もうひとつの新たなコレクションは、Répertoire Universel de Documentation (Rép. PD) と呼ばれるものであった。その名称のとおり、あらゆる形態のあらゆる主題の文献をそのままコレクションにして分類したものである。これはカタログラフィ(文献リスト、目録)、百科事典(要綱、抄録、編さん物)、文書館(1枚物の印刷物、手稿、雑誌から抜き出された論文)の機能を兼ねることを意図していた。⁶⁶⁾ 実際には、IIB にあてられた手紙、各種の報告書、新聞切り抜き、写真、パンフレットなど、IIB が所有していた薄手の資料を、21.5×27.5cm の書類ばさみにいれ、CD によって分類した巨大なパーチャカルファイルであった。これらのコレクションは、他の様々な補助的コレクション・目録⁶⁷⁾とともに、IIB の書誌活動を構成し、〈documentation〉の理念を実現するものであった。

1895年から1914年の第1次大戦前までが、OtletとLa Fontaineのリーダーシップによって、IIBにとって最も実りの多い最も活発な活動のできた時期であった。⁶⁸⁾ 戦争が始まり、ブリュッセルにドイツ軍が侵入してからは、書誌活動はほとんど停止した。1914年から1924年まではIIBに会長もおかれていなかった。その後、1920年代は財政難の時代で、実際の活動はCDの改訂作業程度しか行われなかった。財政建て直しのため、ALAや国際連盟、国際知的協力委員会などが援助に動きだそうとしたのもこの時期である。オランダのDonker Duyvisの提案によって個人会員制から各国の機関を中心とする連盟制に切りかわり、1931年からはInstitut International de Documentation (IID)、1938年からFédération International de Documentation (FID)と名称が変わっていくにつれ、書誌作成からその周辺に横たわる様々な技術的問題に目を向けると同時に、集中的な書誌編さん事業から各国毎の活動が第1のものとして重視され、この組織はその調整・勧告・研究開発へと重点を移していくのである。⁶⁹⁾ FIDは成立と同時に事務局をハーグに移したが、ブリュッセルの元IIB事務局にはそのぼう大な数のカードが今でも残されている。⁷⁰⁾

III. IIBの活動に対する評価

これまで多くの人々が第1次大戦前のIIBの活動に

ついて評価を加えている。例えばOtlet, La Fontaine以降のドキュメンテーションに大きな貢献をしたBradfordは次のように述べている。

……それ【IIBの書誌活動】は実際、ユートピア的であった。いまだ広範な主題索引の緊急の必要性を感じ始めていなかった一般の人々の理解を超えたものであった。当時、単一の図書館に世界の印刷物の巨大な生産物を集中させることは、実際的でもなかった。そうした大がかりなプロジェクトに対するサポートは得られず、そのために通常、その活動ははっきりとした需要が論理的に生じる科学技術の分野に限定されていた。⁷¹⁾

最後の部分は、徐々に活動領域が科学技術に傾斜していく理由の一端を示唆しているが、初期のIIBの活動には必ずしもあてはまらない。少くとも構想の上ではすべての分野が彼らの活動の場であったはずである。

Bradfordが指摘するように、とりわけRBUにおけるユートピア的性格、非実際的性格は様々なところに読みとることができる。図書館の蔵書目録、各種の書誌などの2次の情報源に、切り貼り、分類作業、ファイリングといった加工を行う手続きには大きな限界があった。ひとつの記入に複数のコピーが必要な場合には、複数部の書誌を用意するか、その部数のタイピングをしなければならない。そのため、2種類のアプローチをひとつの記入について行うのは、BUに限定されることが多かった。RBUの3次情報源の性格の問題点は、その全体が2次情報源の特性に大きく依存せざるをえないところにある。完璧性、普遍性をいくら叫んだところで、主題によって、言語によって、地域によって、2次情報源自体がつけられていないのでは、実現されえない。Bradfordに前述のような科学技術偏重の印象を抱かせたのも、分類順目録の多くがBUから作成されるものであり、BUの〈contribution〉のアクティブなメンバーの多くが科学技術の分野に属するものであったという事実のためであったと思われる。

様々な2次情報源のなかには、その価値に信頼がおけないものも含まれていた。また、別々の機関で採用されている目録コードの不統一は、RBU全体をさらに信頼性の薄いものにした。IIBは設立当初から分類法の整備には熱心であったが、目録規則の国際的統一にはそれ程の関心を払っていなかった。1898年にIIB支部であったBureau Bibliographique de Parisによってつくられた書誌記入のコードは、IIBによってさらに検討を加えら

れて同じ年に刊行された。同じものは CD の刊行と一緒に印刷されている。⁷²⁾ BU においては IIB が集中的な書誌作成を行うことになっていたのだが、IIB 刊行の書誌を除けば、実際には緩い協定のもとでそのコントロール外におかれていた。目録規則の国際的統一化は、1908年の AACR 成立で始まったといえるが、IIB もまったく無関心であったわけではない。同じ1908年の第4回国際書誌会議で、AACR 成立の立役者のひとりである ALA 目録規則委員会の議長 Hanson は、AACR 作成の経緯とこれが将来プロシア目録規則との合意をめざすものであることを述べている。⁷³⁾ 1908年から1910年にかけて、この問題についての研究が IIB ですすめられ、1910年の第5回国際会議に目録コードの草稿が提出された。このように、目録ないし書誌記述の統一が世界書誌作成の重要なポイントであることが意識されていなかったわけではないが、これが実際に推進されていくのは第2次大戦後であった。RBU が最初から、既に存在する書誌を繰り込むことを前提として始まったために、目録規則の問題について立ち遅れたのだらうと思われる。同時にこのことは、IIB のとった方法が図書館員の普通の発想とはずれがあることをも示している。

1921年の LA の第45回年次総会で Sayers は、彼を中心とする英国の図書館員グループの IIB 訪問の結果について発表を行った。その席上、IIB の活動に好意的な Sayers に対して、訪問団に加わっていた Jast は Otlet らの考え方が“それ自身を跳び越してしまう程のはやりたつ野心”であり、その国際性追求には疑問があるが、それはブリュッセルが世界の非中心的都市であるためであると述べ、また Hulme は2次の情報源から編さんした RBU には多くの誤りが含まれているのではないかと指摘している。⁷⁴⁾ 後者の意見に対する Sayers の反論は、RBU は書誌編さんや目録作成に携わる人のためにあるのではなく、研究者に直接に情報を提供するためのものだからそれで十分なのだというものであった。⁷⁵⁾ このやりとりは、RBU がそもそも何のために作られたその目的を果していたのかを考えるうえで興味深い。

IIB の仕事は、保管に重点をおく保守的な特にヨーロッパ大陸の図書館に対するアンチテーゼとして評価されるべきである。図書館が書誌情報の利用者への提供という最も基本的な活動を十分に行っていなかった創設当初の状況に照らしてみると、RBU のカードの意味が理解される。それらは、正確で完全な書誌情報を図書館や書誌作成者に提供すべく計画されたものではなかった。

むしろそうした保守的図書館や細々と個別に組織化されている書誌情報と利用者をつなげようという意図があったのである。従って、目録規則の不統一とかカード目録の使用から生ずる限界を、現代の図書館協力や書誌コントロールの観点から論じても得るところは少ないであろう。Schneider が述べるように、⁷⁶⁾ IIB は“近代アメリカの書誌のアイディアと古いヨーロッパの懸橋となった”と考えるのも妥当な見方と思われる。標準カードの使用や DC の導入・展開がその典型的な事例である。⁷⁷⁾

他方、IIB 活動の微視的にみた場合の目標であった利用者への書誌情報の直接の提供が、満足できるものであったとは RBU の利用数からしても主張できない。Jast が述べたように、そうしたサービスをブリュッセルのような単独の都市でのみ行うことは、当時の国際社会を欧米に限定してもできなかったのである。それは、IIB の創設理念の中心が書誌情報の集中化にあったところから生じる当然の帰結であった。問題は、ブリュッセルが非中心的都市であるところにあるのではなく、ひとつの機関がすべてのことを行おうとしたところにあったのである。1900年代初めに、世界ですでに毎年15万冊の新刊図書と40万ないし60万点の雑誌論文が刊行されていると報告されている。⁷⁸⁾ この量を単一の機関が処理することは不可能であった。IIB が普遍性をめざしていたとしても、そこでとられたのは他の機関の仕事をどちらかという受動的に受け入れる方法であったので、そうした仕事に不可欠な網羅性を欠いていた。さらに、個々の利用者が個別の関心をもつ範囲が限定されているとすれば、その処理がより狭い分野で活動する専門的機関に委ねられる方向へすすむのも必然であった。ひとつの機関が、すべての領域を同じ密度の処理方法で世界的規模で扱う必然性もまたその可能性も消滅しつつあったのである。

VI. おわりに

本稿を終えるにあたって、まとめに代えて、IIB の書誌活動をさらに深く研究するための3つの視点を掲げて次の課題としたい。今日の図書館・情報学の源泉のひとつがここにあることは明らかであり、世界書誌作成の理念と実践の研究が現在、将来の我々の活動に大きな刺激を与えることは疑いないと思われるからである。

第1の視点は、IIB の活動の歴史的思想的背景を探ることである。19世紀は技術・産業における急激な変革の世紀であった。特に、産業革命以来、独自に積み重ねら

れた技術の体系が科学的知識と結びつき、さらに発展、巨大化した時期であったといえる。そうした科学技術さらには人類のもつ知識の進歩への期待感のもとに、世界書誌の作成がすすめられたのである。書誌は知識のひとつの表現形態である。1点のカードが1単位の知識の存在を示し、それらを包括的に集め、主題によって配列することにより、人類のもつ知識のカタログがつくりだされるという発想は、この世紀の一般的雰囲気を反映していたのではないと思われるのである。世界書誌の理念が今日でも、単にプラグマティックな意味での有用性を超えて我々にとって望ましいものと考えられているとすれば、それは知識をもつことへの信頼感が依然として維持されているからである。これを疑うことは図書館・情報学の基盤を揺るがすことにもなりかねないが、理念を世界的規模での実践に変えた Otlet らの思想的背景を知ることが、この問題を再考するきっかけとなるだろう。

第2に、La Fontaine, Otlet らにとって、IIB の活動は彼らのもつ理念の達成のひとつの手段でしかなかったことについて触れておきたい。La Fontaine は国際法学者として国際平和運動のリーダーとして一般には認められている人物である。Otlet もまた、国際的な学協会の連合体 (UIA)、国際大学、世界博物館 (Palais Mondiale、後に Mundaneum) といった一般的な国際学術・文化交流運動に、特に第1次大戦後は活動の重点を移した。彼らにとって RBU は、ひとつの国際社会をつくるための国家間協力の鍵であり、シンボルともなるべきものであった。⁷⁹⁾ 第1次大戦後の国際連盟やその下部機関である国際知的協力委員会の成立には IIB も強く関与しており、IIB の財政難の際には上記委員会からの援助も検討された。⁸⁰⁾ ベルギーのような書誌に関して必ずしも進んでいたとはいえない国で、こうした活動が世界に先駆けて行われたのも、スイスやオランダなどヨーロッパの小国といわれる国々に共通した国際平和への強い希求のひとつのあらわれであったのかもしれない。

第3に、最初の課題に戻って書誌コントロールの方法について考えてみよう。Egan および Shera は、個別の要求に従ってつくられるミクロな書誌と全体的な統合のうえにつくられるマクロな書誌の区別を主張したが、⁸¹⁾ RBU はどちらにあたるだろうか。前述のようにこれは個々の書誌の不十分な統合の結果つくりあげられたものであってマクロな書誌とはいえないだろう。RBU が一見総合目録と似た作成過程をもつことは、やや遅れて始まった LC の印刷カード配布から National Union Ca-

talog 作成への動きと比較することを可能にする。NUC は合衆国各地に数十カ所のデポジットをもち、やがて冊子体によって大量に配布することができるようになり、内容も一国の全国書誌というよりも準世界書誌としての性格をもつようになった。それは、合衆国という国家を単位として LC や ALA という強力な統合・調整の機関があって初めて実現したことであった。もし真の世界書誌が可能だとすれば、それは国家を単位とする書誌コントロールをさらに上位のレベルでコントロールしようとする現在の UBC の構想が強力にすすめられるときであろう。IIB の活動は、その理念追求の避けがたい実験であり、さらに実現の見通しに我々を導いた礎石でもあったのである。

- 1) 第2次大戦後の国際的・書誌コントロールの試みについての概観を得るためには次の文献が参考になる。
Coblans, Herbert. *Librarianship and documentation; an international perspective*. London, André Deutsch, 1974.
- 2) 今まど子編. UDC の手引き. 日本ドクメンテーション協会, 1978. p. 13.
- 3) Rayward, W. Boyd. *The universe of information; the work of Paul Otlet for documentation and international organization*. (FID publication no. 520) Moscow, VINITI, 1975.
- 4) Ditmas, E. M. R. "Co-ordination of information; a survey of schemes put forward in the last fifty years," *Journal of Documentation*, vol. 3, no. 4, March 1948, p. 209-21.
- 5) Murra, Kathline O. History of some attempts to organize bibliography internationally. <J. H. Shera and M. E. Egan, eds. *Bibliographic organization*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1951> p. 24-53.
- 6) Lorphèvre, Georges. "Henri La Fontaine, 1854-1943; Paul Otlet, 1868-1944," *Revue de la documentation*, tome 21, fasc. 3, 1954, p. 89-93.
- 7) Scott, Edith. "IFLA and FID—history and programs," *Library quarterly*, vol. 32, no. 1, Jan. 1962, p. 1-18.
- 8) Rayward, W. Boyd. "The UDC and FID—a historical perspective," *Library quarterly*, vol. 37, no. 3, July 1967, p. 259-78.
- 9) Arntz, Helmut. International Federation for Documentation. <A. Kent and H. Lancour, eds. *Encyclopedia of library and information science*, New York, Dekker, vol. 12> p. 377-402.
- 10) IIB についての書誌もその活動全般にわたるものはつくられていない。IIB-IID-FID の出版物として登

録されたものは一連の番号が振られている。これには他の機関や出版社から刊行されたものも含まれる。その目録として、FID. *FID publications; an 80 years bibliography, 1895-1975*. (FID publication no. 531) The Hague, FID, 1975. がある。Otlet の著作については、

Lorphève, Christiane. "Bibliographie des travaux de Paul Otlet," *Revue de la documentation*, tome 21, fasc. 3, 1954, p. 99-102.

Bibliography of the writings of Paul Otlet. <Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注 3)> p. 364-73. がある。

- 11) IIB-IID-FID の機関誌は次のように変遷している。

| | |
|---|-----------|
| <i>Bulletin de l'IIB</i> | 1895-1914 |
| <i>Documentatio universalis</i> | 1930-1932 |
| <i>IID communicationes</i> | 1934-1938 |
| <i>FID communicationes</i> | 1939-1946 |
| <i>Revue de la documentation</i> | 1947-1961 |
| <i>Revue internationale de la documentation</i> | 1962-1965 |
| <i>FID informations</i> | 1951-1955 |
| <i>Informations FID</i> | 1956-1959 |
| <i>FID news bulletin</i> | 1960- |
| <i>International forum on information and documentation</i> | 1975- |

- 12) 小倉親雄. "図書館とドキュメンテーション," 図書館界, vol. 17, no. 6, Mar. 1966, p. 171-8, 196.
- 13) 前嶋正子. "書誌調整の歴史," *Library and information science*, no. 9, 1971, p. 381-407.
- 14) 今. *op. cit.* (注 2) p. 13-26.
- 15) 藤野幸雄. "最後の世界書誌 Paul Marie Ghislain Otlet (1868-1944)," 書誌索引展望, vol. 4, no. 3, Aug. 1980, p. 20-1.
- 16) *Sommaire périodique des revues de droit*, 1894年から *Sommaire méthodique des traités et revue de droit*.
- 17) Otlet, Paul. "Un peu de bibliographie," *Palais*, volume for 1891-1892, p. 254-71.
シカゴ大学ライブラリー・スタールの Rayward 博士は現在、この論文も含めた Otlet の 12 の論文の英訳を準備中で、近いうちに刊行されるとのことである。以下の引用は、"Something about bibliography" と題された英訳の草稿 (20, 6 p.) に基づく。提供して下さった Rayward 博士に感謝したい。
- 18) 英訳草稿, p. 1.
- 19) La Fontaine, Henri and Paul Otlet. "La création d'un répertoire bibliographique universel, note préliminaire," *IIB bulletin*, tome 1, 1895-1896, p. 15.
- 20) Rayward. *The universe of information. op. cit.*

(注 3), p. 40-4.

- 21) IIB では十進分類法を CD (Classification Décimale) とか CDU (Classification Décimale Universelle) と呼び慣らわしていた。どこまでが DC でどこから CD かを明確にすることは困難であるが、一応の区別のため本稿では以下 "CD" を用いる。
- 22) *Ibid.*, p. 43.
- 23) *Ibid.*, p. 46.
- 24) Campbell, F. B. "L'Institut International de Bibliographie," *The library*, vol. 7, 1895, p. 341.
- 25) IIB. Résolutions des congrès internationaux. <IIB. *L'organisation systématique de la documentation et le développement de l'Institut International de Bibliographie*. (IIB publication no. 82) Bruxelles, IIB, 1907> p. 51-2. (決議の VIII-X は省略)
- 26) 他に、企業家 Ernest Solvay の個人的援助があった。彼はソーダ製法に関する新しい手法を考案して巨額の財産をなした。社会改良家・社会学者としての主張もっており、後に Institut de Sociologie を設立した。Otlet の知己で、IIB の第二代の会長を努めることになる。
- 27) IIB. Chronologie des principaux faits relatifs au développement de l'Institut International de Bibliographie. <IIB. *L'organisation systématique...* *op. cit.* (注 25)> p. 36 および Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注 3), p. 51 は 8 月 14 日, Scott. *op. cit.* (注 7), p. 4 および Arntz. *op. cit.* (注 9), p. 379 は 8 月 12 日としている。
- 28) La Fontaine は 1894 年より上院議員として活躍しており、OIB が政府の援助を受けられるようになったのも、その辺に理由があると思われるが、はっきりしたことはわからない。
- 29) IIB. "Institut International de Bibliographie: statuts," *IIB bulletin*, tome 1, 1895-1896, p. 12.
- 30) この時期の IIB の出版物は、後に述べる BU に含まれる書誌以外に、機関誌としての *Bulletin* と注 10) で述べた *Publications* のシリーズがある。後者の多くは、DC の翻訳および展開された表であるが、IIB と協力してつくられた他の機関の刊行物を含んでいる。また *Bulletin* に発表された重要な論文も独立刊行物として、固有の番号を与えられそれに納められている。
- 31) 例えば次の文章などはそれを典型的に示している。"IIB は RBU 作成のためのすべての仕事を集中化して行っている。" (IIB. *L'état actuel de l'organisation bibliographique internationale*. (IIB publication no. 75) Bruxelles, IIB, 1906, p. 19.)
- 32) La Fontaine and Otlet. *op. cit.* (注 19), p. 16-7.
- 33) IIB. *Le Répertoire bibliographique universel et la coopération internationale dans les travaux bibliographiques*. (IIB publication no. 51), Bruxelles, IIB, 1902, p. 5. そうはいっても、彼らの世界が地域

- 的にも言語的にもヨーロッパを中心とする国々に限られていたのは、当時の状況からして無理もなかった。
- 34) 書誌活動のためのコレクションとして、図書2500点、雑誌100タイトルを所蔵していた。(IIB. Répertoires, collections, publications, services de l'Institut International de Bibliographie. <IIB. *L'organisation systématique...op. cit.* (注25)> p.9.
- 35) Pafford, J. H. P. *Library co-operation in Europe*. London, LA, 1935. p. 235-6.
- 36) Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), p. 68-9.
- 37) Murra. *op. cit.* (注5), p. 33-4 を参照のこと。
- 38) IIB. Répertoires, collections...*op. cit.* (注34), p. 29.
- 39) IIB. *Notice-catalogue*. (IIB publication no. 68), Bruxelles, IIB, 1905, p. 14-21 を参照して作成した。
- 40) <contribution no. 1> の *Bibliographia sociologica* は含まれていないが、Rayward によれば、これは3回刊行され6000点の記入があった。(Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), p.117.)
- 41) Otlet, Paul and Ernest Vandeveld. *La réforme des bibliographies nationales et leur utilisation pour la bibliographie universelle*. (IIB publication no. 77) Bruxelles, IIB, 1906, p. 2.
- 42) Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), p. 114-5.
- 43) IIB. *Le Répertoire...op. cit.* (注33), p. 6.
- 44) Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), p. 116.
- 45) *Ibid.*, p. 120.
- 46) IIB. *Répertoires, collections...op. cit.* (注34). p. 19-28. を参考にして作成した。
- 47) Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), p. 52.
- 48) Richardson, E. C. "International co-operation in intellectual work," *Library journal*, vol. 47, no. 19, 1922, p. 915.
- 49) IIB. *Notice-catalogue. op. cit.* (注39), p. 10-11. には、Rép. A, B, Rép. N のカード枚数の詳細な統計が示されている。
- 50) Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), chapter V を参照。
- 51) 1899年にIIBを訪れたアメリカの図書館員Bowkerは、この作業の精神的支柱がOtletであり、Dewey以上に情熱をもってCDの推進に努めていると述べている。(Bowker, R. R. "The Institut International de Bibliographie, Brussels" *Library journal*, vol. 25, June 1900, p. 274.)
- 52) Rayward. "The UDC and FID..." *op. cit.* (注8), p. 264-70. を参照。
- 53) 今. *op. cit.* (注2), p. 12.
- 54) UDC の各版毎、分野毎の刊行史は次の文献に概略が示されている。
- FID. *FID publications...op. cit.* (注10), p. 87-90.
- 55) IIB. *Répertoires, collections...op. cit.* (注34), p. 32.
- 56) Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), p. 122.
- 57) La Fontaine and Otlet. *op. cit.* (注19), p. 38.
- 58) Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), p. 122-3.
RBU複製の問題はIIBの重要な研究課題のひとつであった。これは第1次大戦後のIIB, IID, FIDへと引き継がれていった。
- 59) IIB. *Résolutions...op. cit.* (注25), p. 53-6.
- 60) IIB 主催の国際書誌会議 (Conférence Internationale de Bibliographie) は、第4回、第5回目には Congrès International de Bibliographie et Documentation と名称が変わっている。
- 61) IIB. La documentation. <IIB. *L'organisation systématique...op. cit.* (注25)> p. 7.
- 62) Donker Duyvis, F. "The International Federation for Documentation," *Journal of documentary reproduction*, vol. 3, no. 3, Sept. 1940, p. 176.
- 63) IIB. La documentation. *op. cit.* (注61), p. 9.
- 64) 第1次大戦後にここを訪れたRichardsonは、この図書館が当時15万冊を所蔵し、200万冊を目標に、当時のRBUの規模に匹敵する1500万冊を念頭においていると報告した。(Richardson. *op. cit.* (注48), p. 916.)
- 65) IIB. Répertoires, collections...*op. cit.* (注34), p. 23.
- 66) *Ibid.*, p. 24.
- 67) 学協会についての情報カード (Rép. S), 各国の法律・ベルギーの判例の目録、特許の目録 (Rép. Pe), 美術作品の目録 (Rép. PP) などである。(loc. cit.)
- 68) Scott. *op. cit.* (注7), p. 4.
- 69) 1926年にIFLAが、1946年にUnescoが誕生して、国際的書誌コントロールの問題の多くはそれらの機関が主として担うことになる。
- 70) Rayward 博士からの私信による。なお、次の文献も参照のこと。
Taylor, Archer. *General subject-indexes since 1548*. Philadelphia, Univ. of Pennsylvania Press, 1966. p. 259.
Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), <Preface>.
- 71) Bradford, Samuel C. Fifty years of documentation. <S. C. Bradford. *Documentation*, 2nd ed. London, Lockwood, 1953> p. 135.
- 72) Rayward. *The universe of information. op. cit.* (注3), p. 109. の注56を参照。
- 73) Rayward, W. Boyd. "Librarianship in the new world and the old: some points of contact," *Library trends*, vol. 25, no. 1, July 1976, p. 219.
- 74) Sayers, W. C. Berwick. "The Institut International de Bibliographie: its work, and possib ili-

- ties of co-operation” and “Discussion,” *Library Association record*, vol. 23, 1921, p. 249-50.
- 75) *Ibid.*, p. 250.
- 76) Schneider, Georg. *Theory and history of bibliography*, trans. by R. R. Shaw, New York, Columbia Univ. Press, 1934, p. 283.
- 77) アメリカ的な手法を導入した Otlet や La Fontaine の〈documentation〉が現代の欧米のドキュメンテーション, information science, informatics などにつながっていった事情について次の文献に詳しい。
Shera, Jesse H. and Donald B. Cleveland. “History and foundations of information science,” *Annual review of information science and technology*, vol. 12, 1977, p. 249-75.
- 78) La Fontaine, Henri and Paul Otlet. “L’état actuel de questions bibliographiques et l’organisation internationale de la documentation,” *IIB bulletin*, tome 13, 1908, p. 173.
- 79) この考え方と第2次大戦直前に発表された H. G. Wells の “World Encyclopaedia” 構想との驚くべき類似に注目したい。
拙稿, “知識の組織化と百科事典,” 図書館学会年報, vol. 27, no. 1, Mar. 1981, p. 23-30 を参照のこと。
- 80) 第1次大戦を境に, それまでとは違った国際社会がヨーロッパにおいてできあがり, ここでは IIB や Mundaneum のような集中化をめざす機関は新しい状況に対応できなくなった。そこで登場するのが, この知的協力委員会や IFLA のような国際的調整をはかる機関であった。
Rayward, W. Boyd. “The evolution of an international library and bibliographic community,” *Journal of library history*, vol. 16, no. 2, Spring 1981, p. 449-62.
- 81) Egan, M. E. and J. H. Shera. “Foundations of a theory of bibliography,” *Library quarterly*, vol. 22, no. 2, Apr. 1952, p. 125-37.